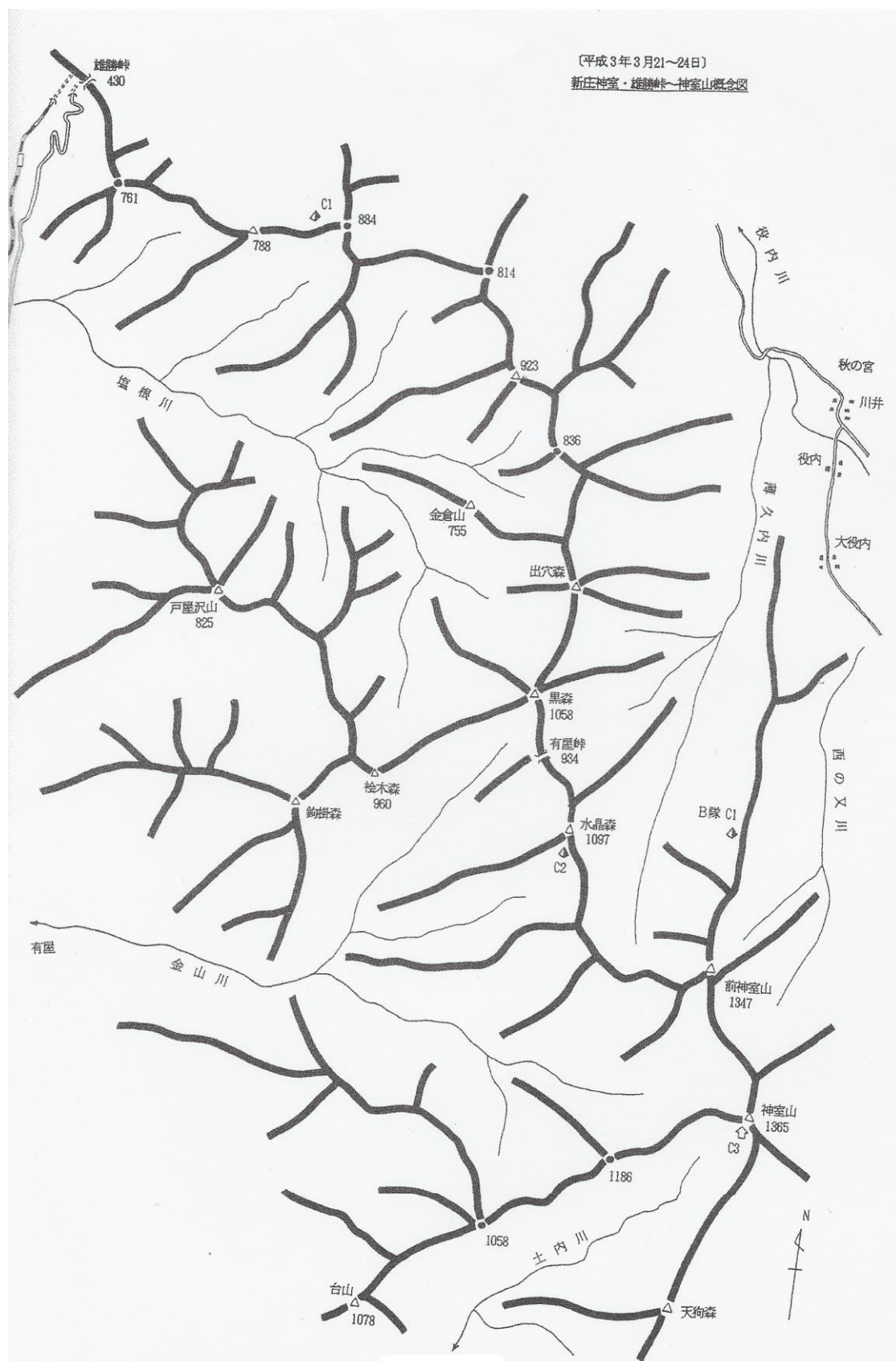


第五章 出羽山地

神室山―鳥海山、葉山―月山、金峰山―摩耶山

「鍋越峠は鳥海山の入口、広い雪原となりブナの巨木が沢山生えている。最低鞍部の雪原を横断し朝日の斜光線の中を鳥海山領域に入ってゆく。目に見えぬ大鳥居がここにはある。巨木の点在する雪原はたおやかな起伏でブナの森へと導いて行く。」



雄勝峠から神室山 県境縦走

平成三年三月二十一日～二十四日

リーダー 佐野 豊、今出隆康、小関純夫

一〇年昔の一九八一年三月、神室山、鳥海山間約一〇〇キロメートルの県境尾根を縦走しようと雄大な夢のアイデアを思いつき、誰にも相手にされず単独で挑むことになった。どんな好条件でも一〇日間は投入しなければならず、停滞日を考えると単独の限界を越えているようにも思えた。何でも樂觀的な私のこと故、失敗を散々味わううちにいつか運が向いて成功するのだと信じていた。

ある本を読んでいて、西の鳥海に対し神室山を東鳥海と昔の農民は呼称していたということに驚いたものだった。お互いの山体はどちらの頂上からも眺められるが、それにして相互の隔たりは直線距離にして四五キロメートルはあり遠く霞んでまるで他人同士……。日本海の鳥海山に対し奥羽山脈の神室山のこととて両者を結びつけて考えるなんて、私ごとき木石には考えも及ばぬことである。この驚きが契機で東の鳥海と西の鳥海を結ぶ計画が頭の中を占領してしまった。栗駒山・焼石岳県境縦走もそうであったが、二万五千図を十数枚程繋がなければ全体が見えない……。かかる計画はいかなれば「地勢図山行」と称すべきものと思っている。

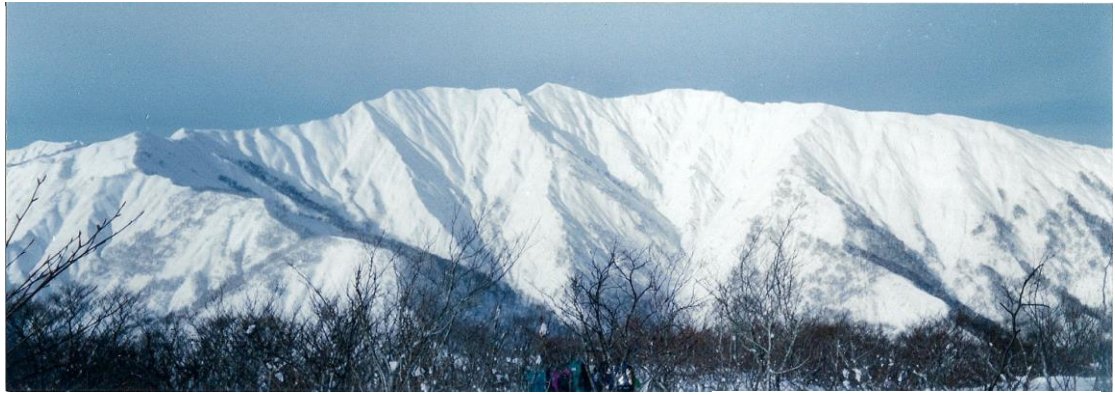
手始めに高度距離図の製作に当たる。新庄市土内から入山、台山経路で神室山、県境を西北に向かい前神室山から高度は一〇〇〇メートルを上下する低山帯となり、黒森以後は次第に高度を下げて雄勝峠の四三〇メートルが最低の鞍部となる。県境には夏径はなく勿論積雪期だけが縦走可能……。雪の締まった三月の最大積雪期が適期で、年に一度か二

度のチャンスしかない。その他低山が多いので、雪の変化が顕しくて高山の縦走とは違った困難が伴うものである。

二年にわたり雄勝峠からの試登を行ったがその度に天候が崩れラッセルに悩まされ偵察の域を脱せずに一泊二日で撤退させられた。一挙に全山は無理なのが現実となり、雄勝峠以東と雄勝峠以西に分割して実行するより実現は難しいと悟った。雄勝峠は遠く、偵察するにも夏径はなくそれが悩みでもあった。しかし、無雪期でも行ける所へは自家用車で出かけた。松の木峠は通行禁止で、やむなく湯沢経由大廻りして上笹子へ出て、甕峠を偵察した。林道終点で駐車して名勝沼を目指したが降り続く雨で断念。次いで丁岳に向かい晴れ間を利用して頂上近くまで行ったが、雪庇に阻まれ家族で登る限界を考え下山。鍋倉峠に向かったが通行止めで引き返し、法体の滝をみてから鳥海ブルーラインに駆け上がり、日本海と頂上部の雪壁をみるだけで、家族を巻き込んだ偵察は徒労に終わった。

何せ雄勝峠以西の避難ルートは適当なものがないのが悩みで、山形側は望みなし。秋田側も村落までのアプローチは皆遠いし交通不便。それがまたこの県境尾根の価値を高めてもいるのだ。ともあれ雄勝峠以東が最強パーティにより実行されるのは喜ばしい。西の鳥海山には年を改めて計画を煮詰め、アプローチしたいものだ。

三月二十一日 嬉しき哉、小関君、佐野君の二名のエキスパートと組んで実施することになる。雄勝峠より県境尾根を辿り神室山へ三泊四日の縦走をするもので、下山は秋田側の役内に下りる予定である。一方、舘岡、山田君ら三名は役内より入山、前神室パノラマコース尾根を往復し、我々縦走隊をサポートしてくれる事になっていた。我々の車は未明の仙台を発ち山形入りし、主寝坂峠を通過し秋田県境のトンネル、新雄勝随道の駐車場には九・二五に到着。除雪された駐車場には他の車が一台駐車しているだけで、よごれた四囲の雪上にはゴミが目立つ。



神室山 平成5年正月合宿

車に施錠して身支度を整え出発する。始めはツボ足で雪の上をトンネル上部へと登る。九・四〇南斜面で天気も良いのでかなり足がもぐるので全員ワカンを履くことにする。トンネルの左手は工事現場となっており、飯場のようなものや労務者のヘルメットも見える。又その先は、奥羽線（JR）院内トンネルと旧雄勝トンネルがあり、それに付随した工事でもあろうか。疎らな樹間を登って行くと傾斜が緩やかになり程なく平らになる。何やらトンネル開通以前は、峠道ここにありの風情が偲ばれる。

峠は二・五万図「松の木峠」にあり、その右下の角のH10mm、W10mm位の地点である。トンネル地点より一〇〇メートル位の高度であろうか。峠の風情に思いを致す暇もあらばこそ、両側に切り立った斜面に挑むことに専念する。この地点は二・五万図の丁度四枚を継ぎ合わせた交点を県境が通っており大変見づらい所である。しかも痩せ尾根で急斜で険しい。痩せ尾根にはキノコ状の雪庇があったり、雪がそぎ落ちて土や落ち葉が露出していたりする。

ヒヤヒヤしながら登降を続け、小さなピークの上まで頑張って一本立てることにする。西の風、晴れながら小雪が舞う。予想通りの痩せ尾根の難関ではある。駐車地点より一時間十五分経過していた。一息ついて再び登り始める。険しい尾根を更に一時間以上かけて、峠より約一〇〇メートル歩いて観測小屋のピーク、六九八メートルに到着。ロボット雨量計などがあり観測データは自動で下界のどこかに送信されるのだろうか。この観測小屋は国道からも眺められるもので、テレビの集合アンテナだろうと思われる。内部を説くと畳敷きの小屋の中に茶碗など転がっており、無雪期にはどこかに径あつて通う人間もいるらしい。しかし装備は荒れていて、果たして観測の用を足しているのだろうか。コンクリートの小屋の東側の吹溜に風を避けて昼食のおにぎりを食べる。三人のメンバーは皆快調とみた。

午後一時、大ピークに至る。七五〇メートル地点なり。晴れていて甕岳がよく見える。

女コシキ男コシキの雌雄二峯が東面の岩壁を黒々と仲良く並んでいる。女小子鬼の女峰には赤穴、男小子鬼の男峰には烏穂子岩と陰陽二つの象徴が存在する修験の場と言われているが、何時の日かまみえん。

寒風にせかれて大ピークから一五〇メートルの高度差を下降、六〇二メートルの鞍部を通過、再び登りに転じて七八メートルピークを踏み、タルミの通過の後登りの途中で一本、一四・三八なり。カモシカの姿を発見する。幕営地を捜しながらの進行となる。八四メートルのピークに近く小ピーク上にC1適地が現れる。

一五・一三皆もやや疲労気味なので少し早いが幕営を決定。矮性の杉の巨木が巡り、何となく神社の境内っぽい頂上台地に青いゴア天が張られる。一六時には全員武装解除してテント内にくつろぐ。カンジキも凍てつき既に氷点下の世界となった。今日は雄勝峠から県境を五キロメートル進んで終わりとなった。

三月二十二日 未明二時半、小雉に起きれば満天の星煌めいて、晴天を保証するかのようで嬉しい。庄内平野はあっちこちに街の灯影が美しい。四時だよの声。朝食を済ませパッキングと装備を整え、勇躍テントを飛び出す。雪はしっかり締まってワカンなしで出発できる。

鳥の声、キツツキのドラム音など賑やかにC1の出発を祝福している。七時の四分前、この四分前が嬉しいね。第二日目のスタートの十数分後八八四メートルピーク。ここから南南東へ八〇度位の角度で折り曲がる地点である。五〇〇メートル程直進し尾根をはずしてクランク状に九〇度東北東に変針する。七二九メートルのコルにて休憩、丁度八時なり。北望すれば役内の平野、秋の宮の白い田圃が見えている。天気は晴れ、やや薄雲かかる。西の風三メートル。八二四Pの円頂以後は尾根も広くなり樹木も低く見通しがよくなってきた。虎毛山、鳥海山、山伏岳、高松岳などの高山が見えてくる。五〇分程の歩行の後

再び一本。幹に KIS とピッケルの落書き……。三人の頭文字だ。くねくね曲がる県境尾根を忠実に辿り八三六 P 付近で昼飯休憩となり、半時間後一〇・四五 軟雪の為ワカシ着用で出発。

出穴森のトンガリに向って猛進する。佐野君はビデオカメラで奮戦中である。正午前、出穴森（八六三メートル）で一本、更に二キロメートル、初めての一〇〇〇メートル峰黒森（一〇五八メートル）頂上へ出たのが一三・一五だった。月山が春霞の上に白い逆光の頂上部だけ浮かんで見える。目を転ずれば岩手山とその属峰も神々しい光を遥かな遠い空に浮かばせている。黒森を下りきった鞍部が九三四メートルの有屋峠である。

水晶森の手前に巨大な反射板構造物が一對あり、ここで一本立てる。一四・二〇なり。かなり暑くて敵わない。風も鎮まりシーンと静まり返っている。ほぼ一五時水晶森（一〇九七メートル）登頂。頂上は氷のドームで南面は雪庇に蔽われている。前神室、神室岳の稜線もくっきりと山頂の小屋も見えてきた。本峰より一五分程下った鞍部の、安定した雪庇上に幕営と決定。またたく間にテント設置完了。仲々けっこうなテント場である。まず雪から水を作る作業から始まり、わがザックに忍ばせてきたジョニ黒で今日の健闘に乾杯。佐野君のペミカンを味噌仕立てで空腹を充たす。今日の行動は一二・五キロメートルの長丁場であった。随分気温も上昇し雪も降ってきた。

三月二三日 昨夜は十一時頃から雨となったらしい。雨と風の夜が明けてくる。五時起床とリーダーの宣言！南の風強く風速十五メートル位か。外に出てみると勿論神室は雲中に没しているが、雲底は一一五〇メートル位でその下は視界が効いて前神室から落ちてくる稜線は見えている。ゴアのテント内は結露なしで幸いである。昨夜の液晶テレビの画面で関東以西は全部雨で、所によつては一六〇ミリも降ったという。夜半温暖前線が通過し、その為かシユラフの中が暑かった。



平成5年正月合宿

七時、無線交信でB隊山田君と話したかったが、これは予定外なのでやはり失敗した。B隊が雨などの理由で行動をどう判断するかなど、基本的なことを知っていたのだが。南東風が西風に変わるまでは天候の回復は望めないのではないかと思われる。

朝食は佐野風「ぞうに」であった。昨日は二・五キロメートル歩き今日は神室頂上小屋まで六キロメートル弱なので、いつになくのんびり構えていられる。最上地方に強風、融雪、洪水警報が出ている。しかし天気回復の兆候あり、雲切れて薄日が洩れたりする。風はやはり強い南風である。

八時、ワッパで出発、降雨で雪質極めて悪い。時々雨が飛んでくる程度となったが神室山は先程通り雲中に没したまま。この付近中級の雪庇でクレバスも所々あり警戒しながら踏んで行く。クレバスを避けて西斜面を捲くこともしばしばだが、雨で腐った雪はワッパを履いていても随分ぬかる。

九時の交信の結果、浅田君欠席で舘岡、山田、重野の三名で今から行動を開始すること、それにしてもスタートが遅すぎるよ。

一時間後九八〇メートルのコルにて一本。ここには尾根上に巨大な露岩があり雨水が水道のように落ちていて飲料水が得られる。樹木が次第に矮性化してツツジやら這松が出てくる。急斜の尾根を登りつめて行くうちに前神室岳（一三四二メートル）に着く。一〇・五〇なり。

烈風に耐えて時々行動を停止する。停止するといっても向かい風の風圧に前進を妨げられ、風の息を伺ってエネルギーをチャージして、また数歩の前進に挑むのである。頂上稜線でも雪は腐りシャーベット状のラッセルが続く。神室頂上一五〇メートル手前で交信の為ストップ。

一二・一〇 神室頂上、五分後に小屋に到着。小屋の二階窓から入ろうとしたが、どうしても二重窓が開かないので西側に回り込み、打ちつけられている丸太を何本か外して、

何とか工作が成功して小屋一階へ入ることができた。その為一時間も費やしたが、厳冬期だったらこれに霧氷がたくさんくっついて、除雪やら丸太解体やらをやっていたら小屋の前で全員討死の事態になったかも知れぬ。

小屋内は吹き込んだ雪が激しく二階は使用不能なので一階の窓を外部から除雪して明かりを確保しゴアテントを張る。雨漏り防止の為二階の吹き溜まりを掃除して戸外に排除、それに備える。八・三〇全員就寝、外は風雨強し。

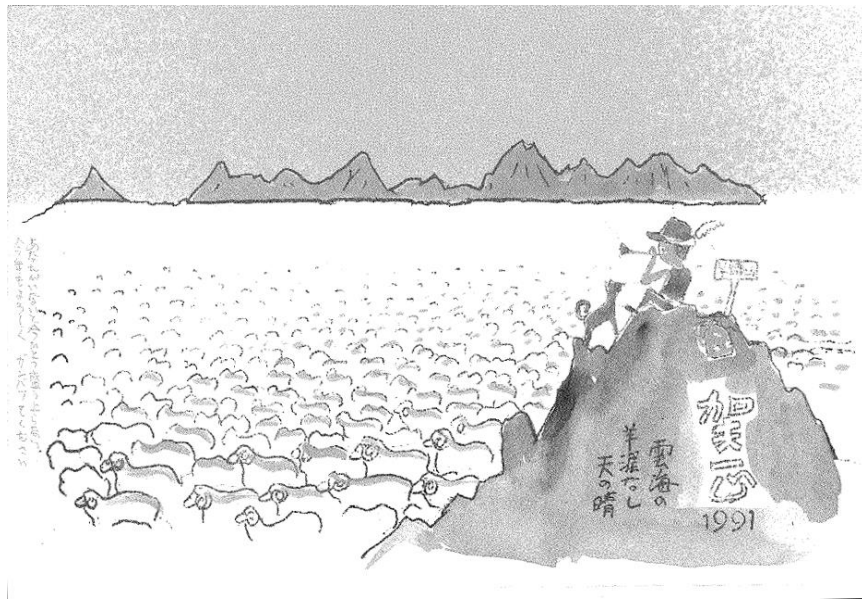
三月二四日 昨夜は強風で小屋の風切り音が凄まじく群狼の遠吠えのように不気味でなかなか寝つかれなかった。未明寝足りてうつらうつらしているとやはり強風だ。風向きが変わったらしくピーブーという音がゴーゴーと唸る音に違って聴える。その小屋に当たる衝撃が地震のように寝ている背中にビリビリ伝わってくる。

六時の交信ではB隊はキャンプ地より発進すること、この小屋に皆を迎えて休憩させコーヒーでも接待した後、六人一隊となり下山の予定。九時の交信が迫る頃、外は晴れてきて先程の荒天とはうって変わり鳥海山も見えるところのこと……。天気予報の高気圧がここまで来たのだ。

しかし、B隊はなかなか現れず遂に佐野君がしびれをきらし山頂まで迎えに行くが、逢えずじまいで帰ってくる。稜線に見えていたB隊は引き返したのであろうか。小屋の戸締まりの為に色々工作が必要で時間を費やす。

一〇・二五 小屋を出発。頂上でお互いに写真を撮り合う。前神室への主稜線上、露出している這松の側に猛禽の残した兎のいけにえ場があった。兎の毛や血が雪面を汚して弱肉強食の摂理を示しているかのようなだった。天気が回復したので佐野君のビデオや小関君のカメラが忙しい。

前神室で昼食後、正午出発。B隊のラッセルをたどり通称パノラマコースの尾根上を下



る。同五五分、B隊のテント前で全パーティ合流、飲み物など御馳走になる。A隊は休憩、B隊のテント撤収作業を待つて二〇分後に一隊となりパノラマコースを引き続いて下る。役内川の流域や部落の屋根、雪の田畑がどんどん近づいてくる。

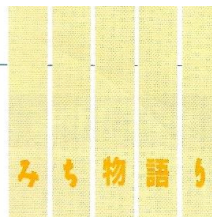
下りも尽きて林道に出る。雪道の両側は鬱蒼たる杉林である。ここで一本立てて下界に着いた安堵を味わう。奉納神室山の大鳥居をくぐり、役内部落に到着。ここからやっと地面と自動車のある世界だった。部落の女わらし男わらしが山から舞い降りた我々を珍しげに見に寄ってくる。

鳥居の遥か彼方に神室の連嶺が静まり返って我々を見送るかのようなのである。装備を解いて身軽になり、足にはスニーカーを履いて車上の人となる。車は横堀を経由して雄勝トンネルへと進む。快い車の振動に身を委ねていうちにA隊出発地点の雄勝峠が近づいてくる。四日前の行動を思い通過の数秒、この山勢急なる瘦尾根もなる程と肯づきながら感慨も新たなものがあつた。

雄勝トンネル駐車場には一六時に到着。駐車中だった車に装備を移し三名づつ二台に分乗した。終わってみればあつけないが未踏の山地を三〇キロメートルも縦走できた喜びは大きい。残るは雄勝峠から鳥海山の六五キロメートルの処女地があるのは男のロマンを掻きたてて実に楽しい。

二万五千図（松ノ木峠、及位、羽後川井、神室山、秋ノ宮、横堀、鬼首峠）

（やまびと三二号掲載）



道なき山は、

未知の世界にあふれている。

天地現象のなかで

生きることにもロマンを感じて…。

山に、道あり。道なき山は沢が道、冬は道ある山の道を雪が消す。道が消えれば人は通わず、肅として神が住みたまう山となる。だが道なき山も、スキー、カンジキがあれば対等になれる。藪は雪に沈んで通行可能となり、申請者には神から「特別通行許可手形」が交付されるのだ。

これが春山というもので、私のようなスノーワンダーにとって、年に一度の素晴らしい機会なのである。わざわざネパールあたりまで遠征しなくても、それに優る冒険の世界がそこにあるのだから…。

脊稜山脈、つまり県境の尾根などを、冬にひとり旅をする。私がこういうことを始めたのは、昭和40年、宮城県山岳連盟の主唱し

た「宮城県縦走雪期縦走計画」に仙台YMCA山岳会として参加したおり、縦走達成をきけなかった他の仲間たちの意志を、宮城でな私が引き継いだ。それからである。

冬が巡ってくる度、せつせと失敗を繰り返しつつもトレースを延ばしにかかる。登りは軽快にキックステップ。下りはグリセード。気温が上昇すれば、ワカンでの登降となる。今日の相手を観察し、強引には動かない。すればきつと自分の願いが達成される。しかし、山の逆鱗に触れると、3日は一歩も動けぬ怖い目にも逢う。風雪、濃霧、クレバス、雪崩、テントなしの雪穴だけの縦走も経験した。

それでも、雪山に向かつてひとり旅立つ心はまるで、翼を得た若鳥の初飛行が、サナギ

を破って宙に羽ばたくアゲハもかくやと思われる。純白の世界に黒いブナの原生林。枝々に霧水の華が咲き、遠く近くアカゲラの木魚の響きが静寂をさわだたせる。独りの山行はどこかピンと緊張感があり、枝のそよぎ、雪の動きにさへ野生の触覚がはたらいているのを知るのである。

近く、国道13号雄勝トンネルから西進、丁山地、鳥海山を越え日本海岸まで65キロ、10日間の旅を準備中。偵察できたところは雄勝峠、こしき岳、丁岳、鳥海山の4つの点だけで、この点を結ぶ線はすべて未知の世界。1000mを下回る登山の対象にしては長すぎる秋田・山形県境である。すでに荒天で2度失敗、今度こそはと意気込むころである。

*キックステップ…靴のつま先で滑らないように雪面を蹴って登ること。
*グリセード…登山靴の底をスキーがわりに、ピッケルを支えに滑って降りること。
*ワカン…藁かんじき



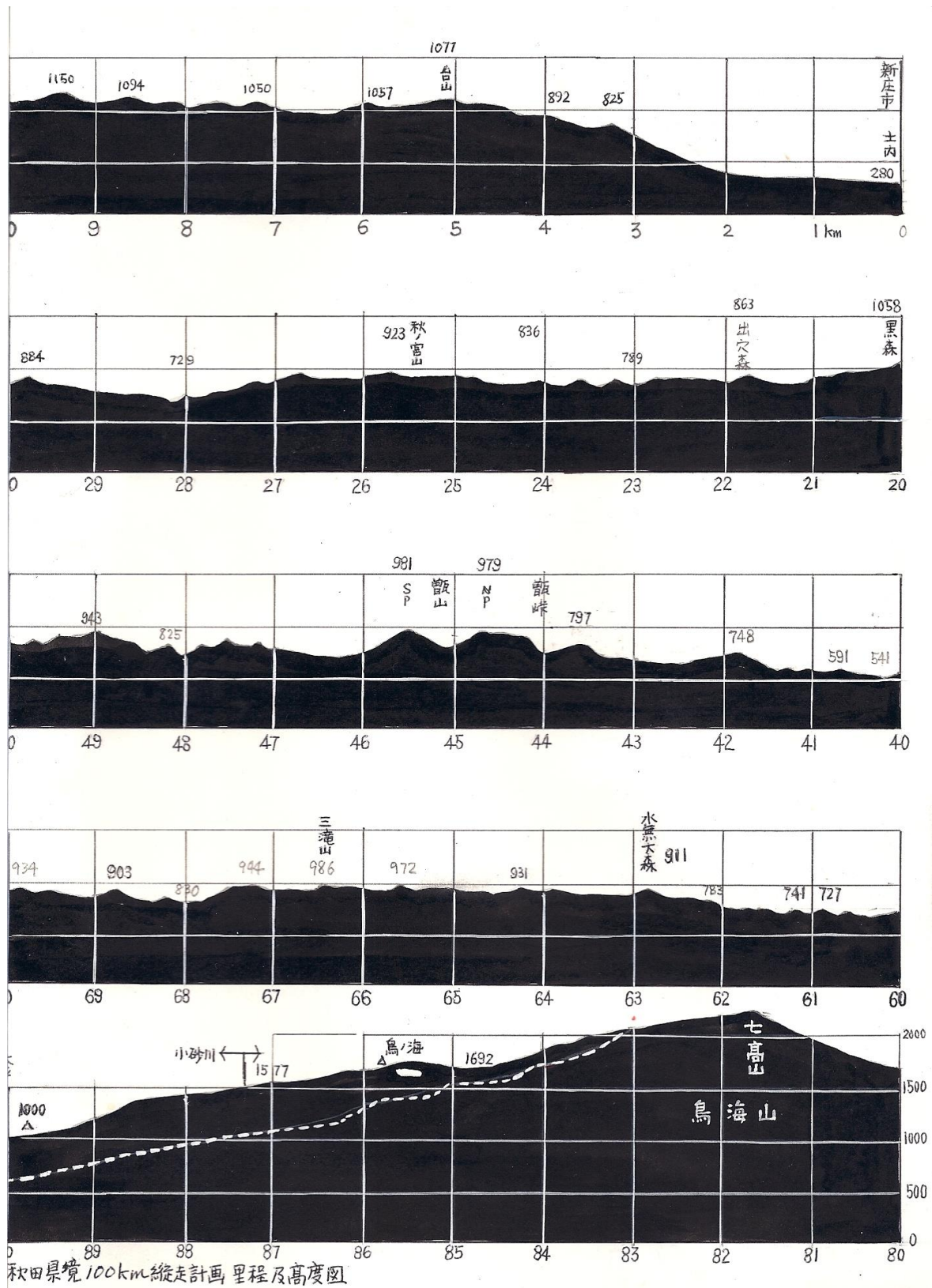
My Long Run

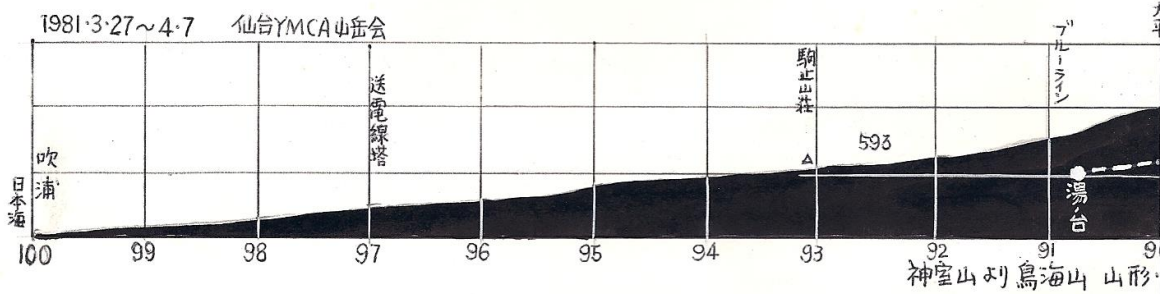
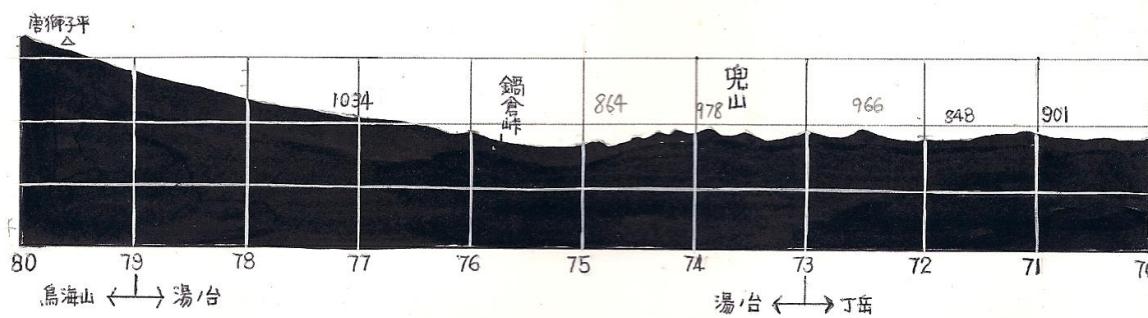
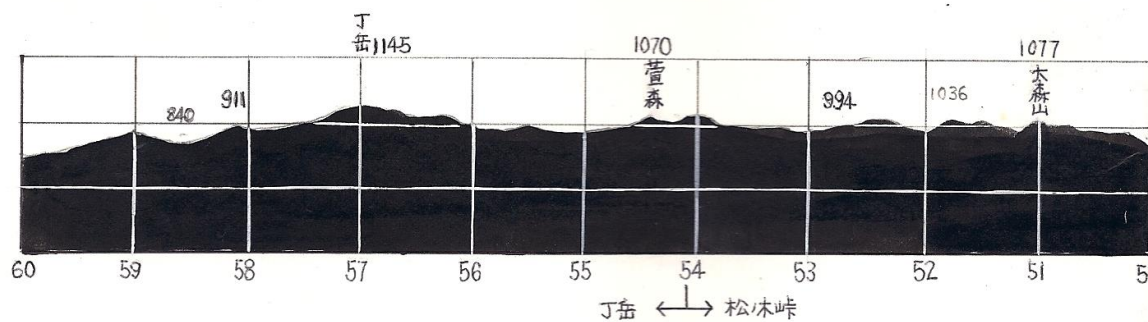
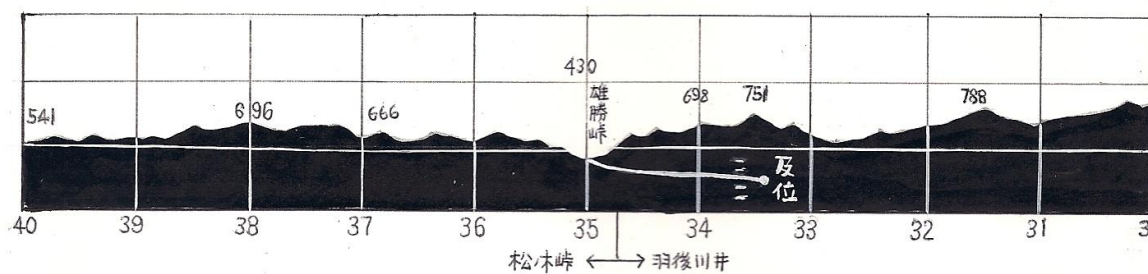
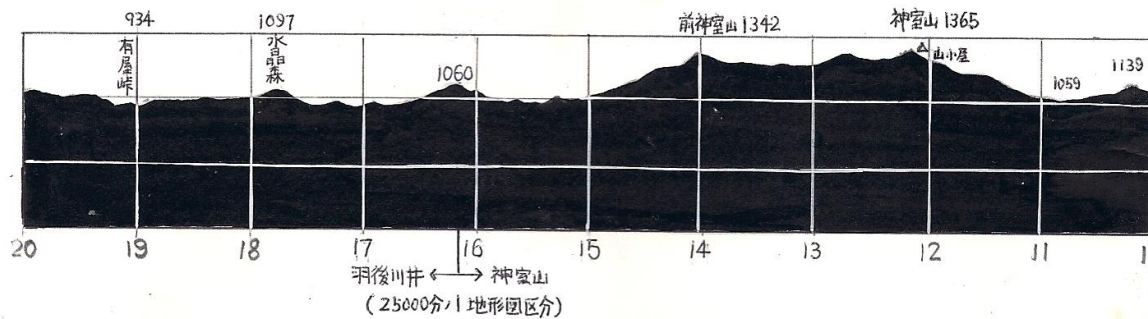
入山のきっかけは、「天の夕顔」を読んだから。1990年～1991年の11年間にネパール・ヒマラヤに5度、インド・ヒマラヤに1度登頂。国内では、日本百名山のうち83座を登る。また、利尻岳から屋久島まで、家族と共に登り続ける。早期5キロのジョギング欠かさず。かたわら日本民謡を20年間勉強中、最近では江差追分を研究中。

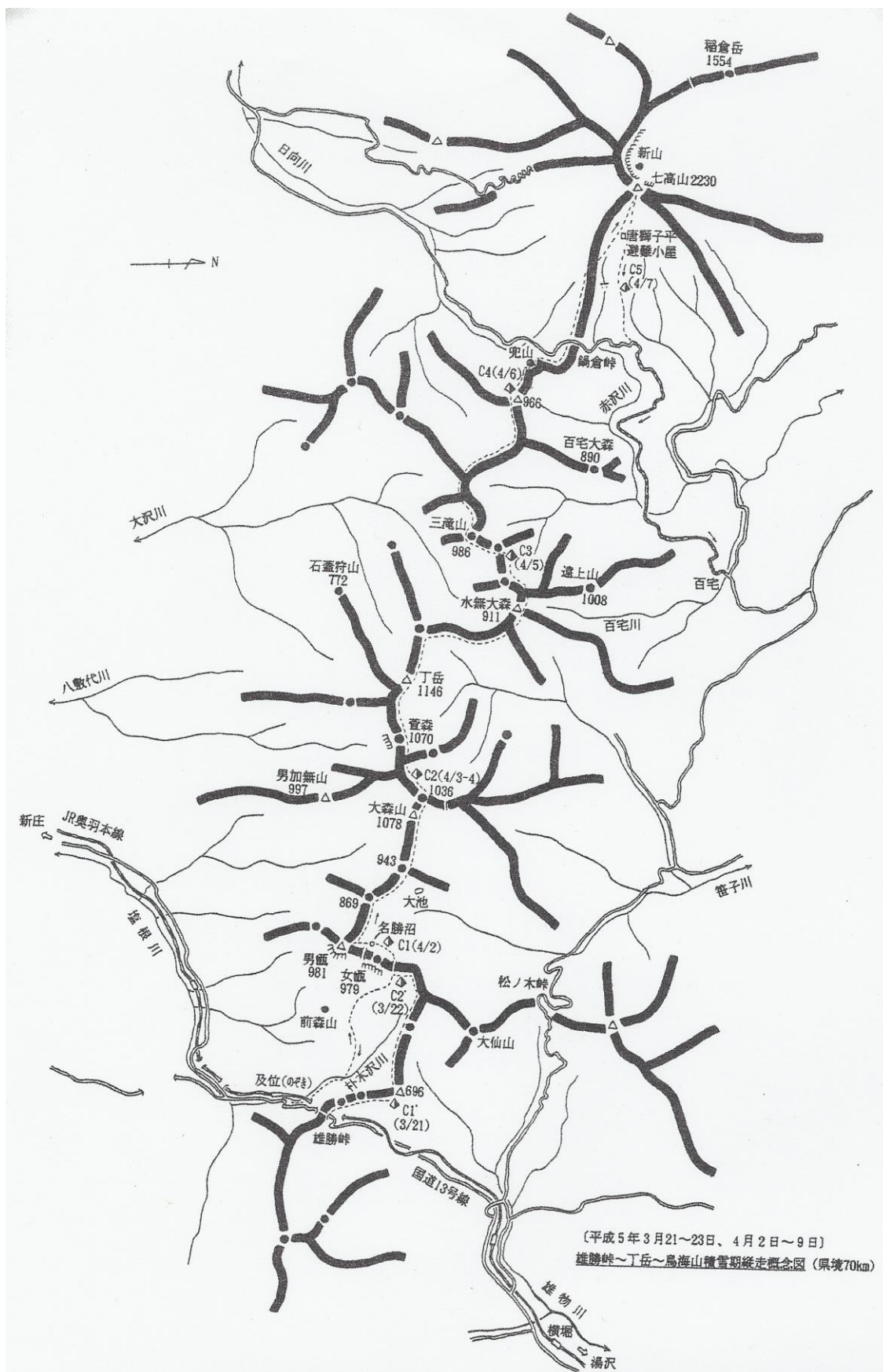
プロフィール/Takayasu Imaide

1934年、仙台市二日町に生まれる。1959年、仙台YMCA山岳会に入会。現在、看板業アルプ・アート代表。一男四女と妻と母の8人家族。









鳥海山への白い回廊

雄勝峠く鳥海山県境積雪期縦走

平成五年三月二日く二三日 四月二く八日

今出隆康（単独）

五十万分の一の地図を広げてみる。鳥海山西麓の吹浦とか小砂川（こさがわ）の日本海岸、そして同緯度の太平洋岸はリアスの三陸沿岸気仙沼の北にある陸前高田、あの有名な高田松原がある。その距離は三二センチメートルあり二センチメートルが一〇キロメートルに相当するので約一五五キロメートル雄勝峠く吹浦間は直線で四五キロメートルなのでそれを三・四倍すると太平洋・日本海間の距離となる。豊かな膨らみの東北大地の三分の一には少ないが四分の一には大きすぎるスケールの山地と認識できる。さてこの山形・秋田県境には無数の低山が蟬集し互いに屈折しながら日本海気象の下、多雪地帯となっている。一〇〇〇メートルを超えるものは大森山、丁岳、萱森くらいで後は七〇〇く八〇〇から五〇〇く六〇〇メートルの低山尾根である。それらの縦走が終わると東北一の高峰二二三〇メートルの霊峰鳥海山があるという極端な組み合わせがこの山行の特徴である。逆縦走しようなどとは一度も思いつかなかったのも毎日毎日ズームアップされてゆく偉大な山体をめざしてゆく巡礼者の気持ちにも似た感情の表れなのかも知れない。

この計画は昭和五〇年に計画して単独で二、三度試登をして失敗している。若気の至りでそのときは神室岳もその範囲に入れ全長一〇〇キロメートルを目標にたてていたのである。会の中では誰一人関心を示さず多分に空想的山行と思われていたコトダロウ。遠隔の地なのと夏径の不毛な山域なので偵察も充分におこなえず、結局は一発勝負をしかけることを覚悟していた。その後、栗駒山く焼石岳の県境縦走にとりかかってしまい、二、三

年費やし失敗を重ねつつ小関君の賛同を得て念願通り経塚山まで縦走して。ピリオドを打つことになった。その後、会山行で雄勝峠から神室山への県境縦走が行われ、未踏の県境を授かってしまった。また館岡君と秋の甕岳登山を行い男甕女甕を登り名勝沼を周回する山行で一つの未知の部分が明らかになった。そんなことでテントもゴアエスパスの新型に換え、新たな高度行程表もつくり平成四年三月に照準を合わせていたがその年は雪が少なくて断念、平成五年多雪に恵まれ今年こそと決心したのだった。

(一) 雄勝峠と甕峠

三月二一日～二三日

●斜陽に翳る甕のシルエット

平成五年三月二一日、小関君が車でサポートしてくれる事になり大いに勇気づけられる。未明、星を仰いで車は出発。昭子夫人と瞭平君も同乗、白みはじめた東北自動車道を北上し古川ICより四七号線を西進、コンビニで写るんですを一台スペア電池などを購入、鳴子、中山平と路面も順調に新庄に着く。さらに一三号線を北上し目的地の雄勝トンネルをめざす。途中の平野より丁岳、鳥海山が美しく眺められ遠すぎるけれども写真に収める。純白の鳥海山と森に覆われた黒い山の低山帯がアンバランスに並んで特徴を際立たせている。トンネルの一〇〇メートル手前に駐車場があり除雪された雪が黒く汚れて周囲に壁を形成している。特別景観がよいでなしチェーン脱着場の性格のPなのでとまる車も稀である。ここで小関ファミリーともお別れである。瞭平君を抱かせてもらい今回の山行の幸運を分けてちょうだいと祈る。遠いところを本当にありがとう、気をつけてねと肩にずつしりと七二リットルのザックを背負う。

時計は一一時を過ぎている。トンネルまでの国道はトラックの疾走と二メートル以上の

雪壁に挟まれて肝を冷やしながら行く。堅そうに思われた雪も昼近いことと南面ということで意外にぬかる。ツボ足で膝まで没しつつ人目を逃れて三〇メートル程歩きワカンを着ける。太陽は燦々と照り南斜面の無風のために気温は一五度位ある気がした。このトンネル上を越して行くのは何回目か、四回五回は通った道で尾根の具合や木の形など何となく懐かしい。四〇分程の登りで旧国道トンネルが見える。ここまで来る人がいたのかスキーのシュプールが二、三条残っている。静かな雪の平で玄米おにぎりの昼食をとる。この使われなくなったトンネルの夏冬恒温を利用して近くの農家がウドの人工栽培をしているとか。積雪一・五メートル位、こんな冬の最中にも枯枝の中に黄色の糸状の花を咲かせる植物にであった。

重荷に耐えながらさらに登り旧峠道の最高点(五〇〇メートル)にでる。両側が切り立って迫りいかにも時代がかった往時を彷彿とさせるものがあり、藩どうしのいさかいに思いをはせてみたりする。南は山形の、北は秋田の里が遠く望まれ僅か百年前までの惨劇と今日の平和を較べる。西側の急斜にとりつき時々腰まで没しながら藪にすがり足場をつくり高度を稼ぐ。十日分の食料・燃料の重荷と初峰への急傾で汗を流し薄着になって一三・四七、初峰六〇四Pに着く。雄勝トンネル三五〇メートルから僅か二五〇メートルの登りなのだが気温と重荷とラッセルで随分エネルギーを費やした気がする。林相は主にブナだが進む程純林となつてゆく。方角はほぼ北、六〇四Pより一旦下り、登りなおして六五〇Pに登る。更に五〇〇メートルの下りと七〇メートルの登りで六六六P、取付より二キロメートル進んで一四・五〇である。三〇分程進むと第一キレットに出会う。尾根が五〇メートル程なくなっている。ザックのままでは通過できずザックをデポして空身となり樹木につかまりながら垂直に降下、一〇メートル程雪壁にステップを刻む。ヤセ尾根を渡り対岸の垂壁にやはり一〇メートル程のステップを工作してザックのデポに戻る。またザックを背負い崩さぬように藪に重量を分散させつつスローモーションで行動する。難

所通過でほっとしたのも束の間、第二キレットに直面し再び同じ行動で乗り切る。このキレットは前回悪天候のため断念した因縁の場所でもある。

一六・〇五、穏やか過ぎる素晴らしい天気にも恵まれたが日も傾き手頃なテント場にも恵まれた。サンライフで求めた三人用ゴアエスパースの初使用である。前回までは小型カマボコ型の「サレワ」号を使用していたのだが居住性、耐雪性、防水性と性能は格段に優秀となり独り泊まるには贅沢すぎる広さである。寝転んでみて満足感にひたってみる。「起きてみつ寝てみつ蚊帳の広さかな」である。自家製ペミカンと玄米おにぎりをホエーブス725でじっくり煮込む。酒は五合パック一つのみ。これで一〇日間、一日一〇〇ccの割当て、ツマミは鮭の燻製ピーナッツなど。

今日は高温のせいもありラッセルに苦労したので、この状態が続けば鳥海山までは無理ではないかと真剣に考えてみる。今日の行動は二・四キロメートル位だが五時間を費やしている現実。午前は車中だったのだからと思つても一日目標一五キロメートルのペースが必須条件の中にあつては誠に遺憾な結果である。西側を並行した谷間を形成して朴木沢川が望まれ前森山のピラミッドと甕岳の特異な双耳峰が逆光の中に近々と眺められる。甕岳は直線で四キロメートル前森山は三キロメートルの距離にある。何せ大縦走の初日は娑婆の疲れを背負い、睡眠不足と十日分の食料・燃料と満載と、たつた独りの前途へのプレッシャーを抱えているのだから充分な休養が必要なのだ。山に入れば何も考える必要はない。あきれる程眠れるのだという期待は喜びなのだ。

●氷雨と風と視界不良の中を（三月二二日）

予想通りの風雪で夜が明けた。ガスで視界が極めて悪い。C1撤収、出発は七・五〇となる。六九七Pを通過いきなり鋭角四〇度も折り返し進路を修正する地点がある。視界が悪いと尾根通しにすんなりと間違ふ地形である。案の定、現場を通過して行き過ぎる。大



会山行 鳥海山南面、滝の小屋にて 左端が筆者

曲点と自ら名付けて警戒していたのにもかかわらずこれだ。六九七Pからは尾根をはずすように五〇メートルの急傾を落ちて行き更に少し緩い五〇メートルの高差を下るので、谷に降りるような錯覚の中で繋がる尾根をさぐり当てなければならぬ。気温は比較的温かく雪が朝から腐ってグシグシとワツパがぬかる。ザックをデポし空身で偵察、ルートを決めるべく九・二〇出発。四〇分偵察行動のあと一〇時に六九七Pに戻る。ラッセル深く能率上がらず徒に湿雪で濡れる。二・五キロメートル位進んで五四一メートルから下がった五一五メートルの最低コル到着一〇・四五。この付近は杉の植林帯であり五〇年もの杉が鬱蒼と茂っている。高度も下がったせいで湿雪から氷雨となり濡れは激しくなる。ラッセルは無視界行動で疲労するばかりか、地図磁石の出番が多く能率はますます低下、せめて飯岳まであと四キロメートルを今日の目標と頑張ったが風も強まってきたのでテント適地を見つけて一五・二〇ストップ。雪底下の樹林帯を設営場所と定め雪固めをする。風も避けられ快適なテント場であった。今日の歩行は約六キロメートルにとどまり、前飯七七メートルの手前二〇〇メートル地点である。

●紫煙の怪と迷路地獄（三月二三日）

四・〇九起床、朝食は充分に採るのが大事なことで、午前中のエネルギーだから。七・〇〇にC2を出発。天気は回復したがラッセルはワツパの着用で二〇センチメートルある。五〇分後、前飯のピーク七九七Pに着く。眼前に女飯が天を突く姿で凄まじい。視界は良く、きのうおととい通過してきた山々がはつきり眺められる。八・五〇このまま縦走に突入するか、再挙を期するかを決定する瞬間が迫った。雪のシマリは大変不満である。気温のせいもあるがもう少し堅くならないと予定のペースが発揮できない。今のペースで突入すれば鳥海山に達する前に日数、食料、燃料を使い果たし完走は無理になる。早朝三時間位はワカン要らずの堅雪でないと所期の縦走は失敗の確率が高い。残念ながら引き返す最

後のチャンス、天氣が回復したのに前進にも後退にも天氣は必要なのである。パツ！と氣前よく計画を放棄するのも美学であり勇氣でもある。二日かけて通したトレースを戻るのも登りと下りの連続と、あのキレット突破などの問題があり、初めて通らねばならぬ二キロメートル四方の甑台地の通過にも大いに不安はある。縦走は次回送りと決意して甑峠を下りはじめた。そう決まれば未練はないサバサバしたココロで里を目指す。

積雪は二・五メートルある。地図磁石で恐らく夏径の上と思われる線をたどりつつ東へ進む。夏だつたら地上二・五メートルの宙を仙人の様に歩いているのだと思うと滑稽である。振り向くと女甑の雪と岸壁が恐ろしい形相で吊り下がっている。甑台地はかなりの面積が杉の植林帯となっている。三十年位の大木やまだ数年ものの幼木の群れを縫って東へ緩く下がって行く。天氣視界大へんよく無風、長い縦走を一旦断念した少し放心状態の行動中であろうか。しかしこの台地は無数の沢が縦横に走り少しも氣を許せるものでもない。地図上では東進する夏径があるが次々と沢、密林が直進を許さない。前方に前森山が次第に大きくなってきた。その時「おや？」と思った。前森山の方角に煙が上がっているのだ。こんな所で？ いやきつと炭焼き小屋があつて誰か炭を焼いているのだ。煙の下には人がいる。そして雪の上にはカンジキか馬櫓の跡が里へと進路を提供してくれる違いはない。ありがたい！ 洪茶の一杯もふるまってくれるかも知れぬ。何ともいえない紫煙のどかな煙に憧れと人懐かしさに喜びを噛みしめながら歩みを進める。

行けども行けども煙は遠くなるような氣がしてきた。摩訶不思議、確認のため立ち止り凝してみる。煙は前森山背景に静かに四〇度位の角度で昇っている。やっぱ煙だ。また杉の森に入る。幼木の時は通過も楽じゃない。時々片足を腿まで引き込まれる。でも先程から煙にちっとも接近できないのでは？ この好天、しかも清々強い朝の空氣の中だ。幻覺などであるものか。地図も磁石も現実だ、そして俺は山から脱出するのに極めて冷静に行動している筈だ。前森山（七八五メートル）も少しは大きくなった山体、その山麓そって

煙が立ち昇ってゆくのだ。また凝視して観察してみる。やっぱり動いている、昇っている。それでも煙が昇ってゆくのには山体のピラミッドの上には煙がないのも変なものだ。ハハー、これは錯覚だ、煙ではない。前森山の頂上部まで達する崩壊谷の山壁が炭焼きの煙に見えるのだ。凝視すればする程ゆらゆらと昇ってゆく紫煙の幻覚。何だかがっかりして煙を見ないように足元ばかり見つめて東進を続ける。何か夏径の証拠でもないだろうかとするが、気持ちである。朝、南東に向かうのだから逆光の中で前森山を見ているわけで、山体も顕著ではないがシルエット状に見える山体は全体に着雪しており、沢が斜めに頂上をめざしその黒っぽい帯が春霞で屈折してかげろうのようなゆらぎを生じる。前方を見ると「ああ煙だ。人がいるぞ、炭焼き夫婦がいるに違いない」とまたしてもその現象に捕まってしまふのだ。凝視していると煙は上へ上へと昇っているのだった。何だコリヤ、いわゆる狐に騙されているってこんなことなのだろうか。幻覚だと何分か前に否定したはずなのに、こんな事を数回繰り返した。恐らく三十分そこそこの白昼夢だったろうか。しだいに地図上の変曲点も近づき、前森山と対峙する角度も変わり、ああ午前の清々しい空気の中で良い夢を見せてもらったと思った。

この間は比較的緩斜面でありワカンも気温の上昇で一五〇センチ程ぬかるスローペースの中であつた。その幻覚が醒めて沢と登り返しの連続の迷路にはまりこんでゆく。小さい沢で二、三メートルの雪の壁なので馬鹿に出来ない。迷えば登り返し地図磁石でやり直した。これぞと信じた尾根状を下る程に沢に挟まり登り直して別ルートを探す。結局夏径の確証もなく前森山を背にした地点から直角に北東方向に折れて、やっと木立の疎らなる雪面を一・五メートルほど下れば朴木沢川の広い雪田に着いた。一一〇〇だった。ここは二本の真っ直ぐな大杉が目印のように立っていて門のような一對の柱も立っている。朴木沢川にそって登りも下りもない平坦な林道の歩行で及位まで行けるのだ。甌峠から四キロメートル余りという中間地点である。



栗駒山より遠望する鳥海山

橋を渡り積雪一・五メートル位の林道を行く。二キロメートル程先で炭焼き場のような伐採地があり雪の上に一メートル位に切った木材が沢山積んであった。そこには木櫓もあり雪上の運搬に用いるようである。ここから古いカンジキの跡が所々に残っていて、それに勢いづけられて朴木沢川の流れのように下界へ急ぐ。田圃らしい平地が現れ奥羽本線の架線が現れ踏切が現れる。踏切は赤い信号灯が腰の高さで、一メートルも飛び下りて除雪された線路を渡り対岸の雪壁を登る。及位駅へは一二・二五に着いた。列車ダイヤは上り下り各六本が停車することになっている。ワッパ、スパッツ、オーバーズボンと装備を解除し列車の到着を待つ。一二・四六乗車、家に電話する暇もなかった。新庄で乗り継ぎ、向かいホームで小牛田行きが待つていてすぐに飛び乗る。こんな調子がいいなんてハッピーだ。大崎耕地は雪のカケラもなく田圃は泥と稲の切株だけがいつまでも続いて行く。かくて最初の山行は終わり再挙のため充電期間を待つことになった。

(二) 甕峠く鳥海山

四月二日く八日

●再び甕台地を越えて

四月二日、今回はJRダイヤで便利な方法発見したので早速その手を使うことにした。即ち未明の急行列車、通称出稼ぎ列車「津軽」を利用するのである。二・五〇山行への昂奮かほとんど眠れず起床となる。娘に運転をさせて仙台駅東口へ行く。人もちらほらの閑散とした駅で切符を買う。「のぞき」と言ったら駅員はいろいろ帳簿を調べてなかなか決まらなかったので、仕方なく真室川駅までの切符三、〇九〇円を買う。四・〇四急行「津軽」が進入してきた。車内では駅二つ座席を占領し殆ど熟睡状態で空席はないありさま。どちら様も青森県まで直行のお客様とお見受けした。それでも座席を一つ確保して目をつぶる。

山形県は小雨となり車窓に水玉模様が流れる。新庄の次が真室川、もう白々と明けはじめ
るが雲低く暗い朝だ。六・一八真室川で鈍行列車に乗替え、ガラ空きの一番列車で朝食の
おにぎりを食べておく。走る列車の窓から白鳥の一群の低空飛行を見る。北に向かう列車
に並行して白い翼が同速度でしばらく眺められた。白い巨鳥の飛翔は白い霊峰のイメージ
と重なり吉兆に違いないと密かに喜んだ。

及位の駅で降りたのは私のみ。それでも近所の商店のお内儀さん駅員が待っていてくれ
た。待合室の週刊誌を一冊貰って合羽と入替え六・四五及位を出発。しとしと春の雨が降
り続くなか、アスファルト道路はすぐ雪道となり、しばらくはツボ足で行くがそれも束の
間でワカンが必要になる。前回はエキスパート型とか巾が狭く前後に長い固定バンド形式
だったが今回は丸型のやや軽いアルミワカンを使用した。こちらの方がキックステップや
履き慣れの点で有利に思えたものだから。

今回は前回の雄勝峠く甕峠間は既にトレースした事なので、この区間は割愛し甕峠へ直
登する事にした。地形図「松の木峠」を眺めると距離的には前者の九キロメートルに対し
八・五キロメートル程と大差ないが、朴木沢林道の利用で有利であることが迷路台地のシ
ンドサを敢えて選んだ理由である。また縦走路をもう一度やることはトレースしたと言
え時間的にはかかるし大縦走の予定日を喰いつぶす恐れもある。左手に朴木沢川の流れを
見ながら林道を遡行、途中に赤い鳥居があり小さな祠が唯一目立つ。馬櫓のある藪伐りだ
し地点を通過、歩き出して一時間五〇分、気温高く合羽着られずザックにさせて歩いて来
たが、小雨もいつしかまばらとなり空もやっと明るくなりつつあった。一本杉の尾根に取
り付き点につく。一息入れて景色を見まわしたら広々とした雪田と伐採地の斜面に一〇日前
に自分のワッパの痕を見つけた。よくぞ一〇日間も保ったもんだと喜んで出発、しかし間
もなくワッパの痕も消失し以後コンパス行進となった。雪のシマリは気温が高いためと降
雨のためとで軟雪である。ちょうど一二時、小雨は上がり薄日もさしてきた。それにして

も随分時間を消費しているのに驚く。ゆっくり昼食をとりながら現在位置を確認し、あの前森山の妖術を思い出したりする。前森山七八五メートルの北面が崩壊谷となっていて、幅広い谷が上から下まで続いている。甑台地の下りは沢に阻止され何度も上がり返して苦労したが、登りならそれほど迷わずにたどれると思っていたのに登りも同じ迷路であった。甑台地の緩斜面の登りとなり正面に奇峰女コシキを時々眺めながら前進する。尾根をたどるなどという単純なものでなく、緩い登りの次は緩い下り、杉林は巨林帯になったり幼木帯となったり暗くなったり明るくなったり、約二キロメートルを二時間かけて甑峠につく。この前の下りは迷いに迷って三時間半ちようどで及位に着いたのだったが、登りはその二倍七時間以上もかかった。やはり甑台地は曲者だ。

男コシキはガスで見えず女コシキの姿は見える。雪はぐしよぐしよになりワカンも粘り二〇センチのラッセル状態である。県境は峠から女甑岳と男甑岳と続いているが、今にも崩れんばかりの女コシキ稜線は危険で取り付くことが出来ず慎んで敬遠することにする。女コシキの北斜面の麓を半周するように進んで行くがこの付近は過去何度かに女甑西壁から別れた巨大な山体の一部が点々と存在しロック・ガーデンを形成して見事である。名勝沼に近づく頃から再び小雨となってくる。ロックの上の笠雪から一斉に水滴が落ちはじめ、中には一条の滝となつて注ぐところもありコッヘルに受けて飲料水に使用する。名勝沼北岸にテント設営、いつかはここにと憧れのテント場だったが今ここに実現。水面は岸辺に僅かに開けど氷が睡る仙境名勝沼である。一連の作業を終えてテント内に落ち着きコーヒーを飲みながら気象通報をキャッチする。北緯三五度東経一五一度に九九八ヘクトパスカル ENE 春近しの小雨がテントを叩く音を聞きながら、初日の健闘を讃えささやかに乾杯し独り唄をうたい乾いたシュラフにもぐり込んだ。

●前進を拒む行者岳の壁に衝きあたる



朝焼けの鳥海山と滝の小屋

四月三日、六・〇三出発。氷結の名勝沼は山側を迂回する。次第に男コシキの麓となり疎林の中を県境のコルを目ざす。天気はよく従って気分もよい。昨夜の熟睡のおかげであろうか。美しい雪の斜面と山のシルエット、大小のブナ仁たたまいとメルヘンの世界である。コルにザックをデポり高度差二五〇メートルを空荷で往復する。斜面はさすがだが尾根の雪庇はシマリ順調に男甕の頂上に達しながら凄絶な高度感を味わうことができた。隆々たる男岩の雄姿も拝みすぐ下降にかかる。あちらこちらからキツツキの音が響いて賑やかである。すぐザックを担ぎ北西方面に尾根をたどる。尾根の末端にでて地形確認。二つの甕には気温の上昇に伴いガスが発生し、写真が撮れなくなってしまう。ガスは西へとゆっくり流れて行く。

八六九Pに登る。ガスが切れて甕の双峰を撮影できた。向かいの八二五Pの手前にキレストがあり僅か一キロメートルに満たないのに一時間を要して通過、登頂。男加無山が見事な岩壁を誇るかの八敷代川の深谷を隔てて聳え圧巻である。C1出発五キロメートルで九四三Pにたどり着く。全く無風で眼下に大池の青い沼が見える。名勝沼が学校の校庭くらいだったがこちらは三倍四倍位大きい。完全凍結しないようで一部青黒い水面が見える。ここで大休憩だ。出発前夜は妻と三女の誕生祝いがあったのでエビフライ、サラダ、ナゲツトなどバックしてもらいこの別世界で賞味した。三〇分の休憩で充電完了。一〇・五〇出発、目指すは二キロメートル先の一〇〇〇メートルを越える山、大森山一〇七八メートルである。八六四Pまで平凡な尾根であったが大森山の手前一キロメートルに高度差二〇〇メートルの壁状地形が八〇〇メートルの幅で尾根に直角に通せん坊して出現した。岩記号も二段ある。岩バンドをはずして登攀にかかる。一汗かいて壁を突破し汗を鎮め大森山稜線尾根となり、以降は坦々と高度を稼ぎ大森山登頂。この先は一〇〇〇メートルを抜くピークが三つ連なるが屈曲が激しい地形である。休憩しているうちに風が出てきた。大森山からのクランク状尾根を行くが、一〇三六Pは頂上から尾根をはずしていきなり七〇メ

ートル直角に下り県境をたどるのであった。

一五時テント場によい所でストップ、ザックをデポり行く手の城砦を偵察に行く。大森山から遠望された難所と目される地点だ。そしてその先はテント場には難しい瘦尾根地帯と見受けられた。空身で城砦に見えたバットレスに接近する。明日の突破口を探しておく必要があるのだ。真向につめると一〇メートル程の岩壁に衝きあたる。下部は雪塊がゴロゴロと重なりそれを梯子に攀じ登ると岩との間にシュルンドが口を開けている。多少の藪が生えていてそれにつかまり空身なら被り気味の岩を登れんこともないが、その上に雪庇がオーバーハングしていてその突破が又難関である。ちよいと考え込んでしまう。軽業をやってもザックを吊り上げるザイルはないのだ。下手をすると身もザックもベルクシュルンドに吸い込まれてしまう。行者岳バットレスには我計画を拒否するのだろうか。一晚寝ている間に伸縮梯子が届くでもなし、頭上の雪庇が融けるでもなし。先程から雨は本降りになってくるし、立っていても濡れるばかりで仕方ない。行き詰まりだ。お神酒でも上げて明日また改めて考えようと、岩壁を離れ五〇メートル先のC2に戻りかけたが、その時キラッと頭上にスパークする考えが走る。バットレスの末端がある筈、加無山側に谷を降りてみようというものであった。壁に沿って高さ三〇メートル程下ると垂直方向は終わり岩の末端に達し水平歩行となる。廻り込んで見て行くと岩溝に雪が詰まって上方に真っ直ぐ伸び、かなりの傾斜だが上部には藪もありそれにつかまれば直上五〇メートル程で主稜線に出られそうな塩梅である。慎重にキックステップを刻みながら半分ほど試登する。しかし登り過ぎると加工が難しくなるのでステップを崩さぬよう、そろりそろりと壁に向かったまま下る。ステップを崩すと滑落だ。荷を担いだら崩れる可能性が高くなる。早朝ならば凍結により雪の梯子も堅くてうまくゆくかもしれない。突破口はここだ。ザックの重量で後ろへ引っ張られるだろうが藪を利用してきつと上手くやれる……。縦走は継続できる！と堅く信じつつシュルンドを飛び越えてC2へと這い上がる。C2設営。雪鋸で雪

を切り出し立方形のブロックを積み暴風に備える。今日は九キロメートル強の縦走であった。思うように前進できないもどかしさを感じながらホエーブスの音を聞いていた。

●無念イズマスイ沈黙の一日(四月四日)

雨から次第に雪となり量はさほどでもないが風は強い。防風ブロックが心強い。昨日は風の唸り声で殆ど眠れずに夜を明かしてしまった。朝になってやや鎮まった小雪とガスで視界はない。五時半、ラーメンをつくり番茶を沸かす。気象情報も芳からず、今日の山行は行者森、萱森、丁岳と峻嶒な一群の突破なので行動は難しい。行動か停滞か逡巡し悩むのだが、結局休養日と決定した……優雅なホリデイ。なんて俺は贅沢なのだ。及位駅で貰った週刊誌を読もうとしてシニアグラスを探す。ザックの底ポケットの類シユラフの中まで探したががない。最後の使用は九四三Pだったか、大森山だったか、地図を見るために使った筈だった。休憩中に雪の中に落としてしまったようだ。テントの外にも出て雪上を捜したが勿論無駄だった。停滞用のアガサクリステイの小説も読めなくなってしまった。仕方なしに充電式カード・ラジオを聞いて又シユラフにもぐり込む。暖房用にホエーブスを使う程燃料はないのだ。湿雪がテントに積もる音を聞きながらもし天氣が回復したら二時間でも三時間でも行動したいと思っている。寝ているだけでは飽きてしまうので週刊誌を拾い読みをする。歌手のマドンナの写真などがある。マドンナは好みじゃない。モンローやリズの方がよっぽどいい。おれも古ーいのかあ。ピーナッツ、黒パン、なめこ汁、コマイなどで昼食だ。ここでも東北放送の電波がキャッチできる。

丁山地は最高地点丁岳(二一四五メートル)を盟主に二〇〇〇メートルを越えるもの、南に雁唐山(二〇四五メートル)萱森(二〇七〇メートル)観音森(二〇五八メートル)大森山(二〇七八メートル)庄屋森(二一〇〇メートル)一〇三六Pの七峰があり、標高こそ低いが山体は峻嶒で沢は深い。一〇〇〇に僅かに満たないが男加無山女加無山等の峻



峰と岩峰を有し、全山にわたり岩壁記号が豊富であり又滝記号も多く身震いするような畏怖を感じる。丁岳の南西に九八七メートルの岩峰があり沢ひとつ隔ててなかなかの偉観を呈している。南面山形側、真室川町から登山道が全くないのはどの尾根どの沢も登山に適さぬ地形のためと、やはり抜きん出た高峰がない事、名峰鳥海山の存在であろうか。

午後一時半、観音森が見えた。西走する県境尾根から約一キロメートルの長さで北に突出する庄屋森、一〇六四P、観音森の障壁：：その観音森に黒い岩壁が観音の立像のように見えるのだった。積雪期の県境から見られるこの岩壁は誰でも見られるようなものではない。夏径のない県境であるし雪が付いていてこそその立像が存在するのではなからうか。それとも観音森と言うその名称から連想してただの黒い岩壁が観音森に錯覚させられるものか。それにしても観音岩と称するものが丁岳の夏径上にあり、観音森に観音岩がないのも不思議なものだ。観音森を二万五千図で見ると東面に岩記号はない。傾斜は非常に急峻であり底雪崩で黒い地肌が現れて出来たものか？

雨になったり雪になったりのため積雪は数センチで水っぽくなり半分は雪に浸み込んだものだろう。明日の目標は丁岳を越えて水無大森、三滝山まで行きたいものだ。静まった山中に鳥の声なども聴かれ、天気予報も明日は晴れを報じている。

●丁の峻嶺を翔けば（四月五日）

三・五〇目が醒めた。低気圧が去って冬型の気圧配置となり気温は低くテント内も凍結している。今日のエネルギー源を腹に充たし、テルモスにも茶を満たす。六・五〇ツボ足のままで出発。庄屋森の岩帯を避けて南面の沢を下り岩溝の偵察ステップを慎重に攀じ登る。ザックの重さで背後に引つ張られるので上半分は僅かな藪を頼りにキックステップと一部ピッケルのカットを交えながら身をずり上げて行く。高距一〇〇メートルの内、通常の登りに変わる地点で一息入れる。五〇分程費やしている。ここでワカンを着用、今のと

ころ天気はよく視界が広い。庄屋森の頂上から観音森への北稜線を右に見ながら真西へ進路をとる。足元に萱森の三角錐との間に深いV字型で接続する鞍部がある。一〇〇メートルに近い急斜の下りである。多少矮性の樹木があるが雪は堅く滑落の危険があるので、緊張しながらワツパの爪を効かせ腰を落としながらゆっくり下って行く。両側も山体は切れ落ちて丁山地の峻しき面目躍如たる風景である。鞍部から萱森の登りとなるがこの付近はワツパが危険と思われる時はすぐに脱ぎ、ツボ足で行動したり、またワツパに履き替えた何度か安全確保のために繰り返している。ナイフリッジも多くスリリングな渡りも何度かあった。萱森の頂上は北面を僅かに逃れてトラバースで通過。十年前この頂上を縦走したことがあった。あの時は麓でコゴミを持ち切れないほど授かった記憶がある。一〇七〇メートルのピラミッドから九〇〇メートルの最低鞍部の「風のコル」に向けて下降、八四〇〇ここで待望の一本を立てる。

真西へ約一キロメートル、その中間の九八九Pが広い他は雪庇の痩せ尾根を伝って行く。北側は五階滝を擁する丁川の源流地帯へ藪落ち、南側は小又川の源流に垂下する。真室川の峻岨な山岳地帯に雁唐山が一五〇〇メートルの至近で望見される。一番心配された丁岳の取り付きヤセ尾根は北西に変針し、更に一キロメートル両側ますます切れ落ちて蟻の戸渡り状態で今縦走の見せ場を呈してくる。夏径がこの下であり一度は俺の足跡が残っているという記憶だけでも、孤独の縦走者には励みになるのだった。断崖上のヤセ尾根を突破すればこれまた何たるコントラスト、飛行場のような広大な雪原が現れる。白銀の白以外何もなし。そして憧憬の彼方鳥海山が巨大な根張りでその山体が鎮座します。上方半分五合目ほどは雲に隠れて拝まれないが、雲の灰色に対して山麓の白衣の裾は妖しく白銀に輝き又一段と凄みと畏怖の情が迫る。雪原に一条のラッセルを引きながらあるかなしかの頂上の高みへ厳肅な気持ちで歩を進める。一本の杉丸太の先端の露出を頂上と認め、しばし安息の時間を迎えた。時計は一一時を示す。ああ、とうとう丁岳までやってきた。ここ

まで四日を費やしたが県境二二キロメートル地点に達したに過ぎない。これは計画の三分の一を踏破しただけである。時間切れで山里へエスケープしても交通不便なこの地域は容易に救われるものではないし、停滞日を一日費やしたのでこの先停滞は難しく帰仙が遅れて本部連絡に騒がれるのが一番辛い。視界のよいうちに難所は突破しておきたい。テルモスの熱い紅茶とチップドーナツで元気を回復し、丁岳の字源と言われる平状の頂上を横断すれば又もその絶妙な対比たる肩の張出しから下るヤセ尾根地帯との対決が待っていた。九一一Pまでの約一キロメートルがそれであった。南面に明神沢の深谷を見おろし対岸に九八七Pの猿山のような磊々たる岩峰がしばらく眺望できる。何とか丁岳西稜九一一Pを乗り越し、更に一キロメートル緩やかな鞍部を這い上がり九〇〇メートルの細長いピークに立てば県境は大きく曲がり、北東へと折り返し次第に北へと約四キロメートルの尾根を水無大森へ続く。大沢川の水系となりこの前進では最低の七〇〇メートルを割るコルが二つ出てくる。一三・三〇六七〇メートルの最低コルで一息入れて更に一時間後の一四・四〇水無大森に着く。鳥海山の雲底がここまで伸びて来たのだろうか、ここでは俄雪が激しく吹きつける。行動食で胃袋補給、三滝山までもう一がんばりするぞ。水無大森（九一一メートル）からは西に県境は曲がり一キロメートルで小ピーク、直角に南へ三〇〇メートル程で九三一Pここでまた直角に西へとヤセ尾根の連続である。テント場を意識しながら行動しているのがなかなか見つかからない。三滝山を目前にして一キロメートル手前一六・二〇九七二Pの広い尾根でストップ、風雪強まる中で設営作業にかかる。敷地と防風ブロック壁の製造である。吹き曝しの尾根なので作業は手抜きのないよう完璧を期す。真っ暗になる前にテントに灯がともった。C2から一二・五キロメートルの難所地帯を歩き通した。天気にも恵まれたのもう少し行けそうな気がしたが、それは不遜というものでろう。ラジオは明日の山形県はやや良好に経過する嬉しい予報であった。

●新雪のラッセルと肩の痛み（四月六日）

一晩中荒れてテントも雪で埋まった。雪は止んだが風が強い。嬉しや、天氣が良くなってきた。七・三〇、C3撤収、出発。新雪と強風があちこちに新しい雪庇を造り出している。ほぼ尾根上に雪庇のできる所もあり、ハング雪庇の突破工作に空身で雪鋸を使いルートを一ひらく。新雪のラッセル二〇〇三センチ、八・四五、三滝山（九八六メートル）頂上着、直角に右折してヤセ尾根は繋がってゆく。南面は大沢川も最も悪沢の嶮谷六〇〇メートルの高度差で滝記号も二つあり三滝山の名もこの辺りからついたものやら。九四五Pと進み仮称三滝くびれ、ここで沢一つ間違えて下り、気がついて登り返す。雪庇ルート工作もやりながら複雑な尾根を突破して行くが視界が明るく有難し。一一・〇〇〇三〇、九〇三Pにて昼食。赤飯・パックとチーズを食べる。遠くサイレンの音が聞こえてきた、どこか秋田の町の役場が正午を知らせるためのものであろうか。懐かしい人里からのメッセーヂに感激し、歩を止めて音源を捜してみるのだった。一三・一八、九三四Pを通過、一くせ山と命名してメモしているところを見ると何かあったのだろうが思い出せない。

一四・二二、九〇一Pの南北にひよる長いピーク、この山は山頂部に黒い岩壁が低く巡っていた。鳥海山もずい分近くなった。もうパノラマ・カメラの眼でないと同時に両側の山裾を見ることが出来ないのだ。今日も山頂は雲がかかり、広い広い山麓のみが樹間より時々みられる。少し軽くなってゆくザックなのに今日は肩が痛くて耐えられなくなる。九〇一メートルの長平山も鋭角の変針、トロトロ下れば八四八P、緩やかな登りで西に進めば九六六Pのトンガリ山。雪庇をたどって一〇〇メートルの急降下の後、雪庇をたどって兜山へ再び一〇〇メートルの直登。九七八Pと兜山の鞍部の小平に設営C4建設。一六・一二であった。また雪が降り出しその中で防風ブロックを積む。新雪のラッセル、交代の友がいらないラッセルは能率が悪くてペースがあがらずじまいに終わる。今日の走行は八キロメートルであった。一七・一八テント内に倒れ込む。気象通報を聴いていると明日は置



凍てつく鳥海山

賜、村山、最上、庄内いずれも風雪というし雷警報まで付いている。午前持つか、朝方だけかな、何とか鳥海山に達して荒天の前に鳥ノ海にC5を建設したいものだ。

● シュカブラの七高山（四月七日）

四…〇四起床、今日こそ鳥海山に達する日だ。後半、天気は荒れるので午前中が勝負かも知れぬ。充分な朝食を済ませC5を撤収する。六…二五素晴らしい天気を迎え、ワカンで出発だ。眼前に聳える大鳥海の麗姿、今回山行で鳥海山の全貌を見るのは初めてである。毎日毎日目の前に鳥海山があり時々刻々山が大きくなり、その絵の中に入ってゆく自分を計画中は夢見ていたのだが、現実には藪山のあがきの連続ではなかったか。今は初めて頂上を現した大鳥海、今日の登攀で登頂が許されるか、あるいは叶わぬか。いよいよその時が今日中に決せられようとしている。いやが上にも気が昂揚するのを制することができぬ。カタパルトの引力とジェット・エンジンの全快気分で九七八Pの五〇メートルの高さを登りきって、まだ残っている鍋越峠までの二キロメートルの距離を馳せる。ピークを二つ越して八六七Pのラスト・ピーク、その急斜面に難儀しつつ下る。

鍋越峠（八五〇メートル）は鳥海山の入口、広い雪原となりブナの巨木が沢山生えている。最低鞍部の雪原を横断し朝日の斜光線の中を鳥海山領域に入ってゆく。目に見えぬ大鳥居がここにはある。巨木の点在する雪原はたおやかな起伏でブナの森へと導いて行く。高度五〇メートル位で秋田鳥海村と山形八幡町を結ぶ林道鍋越峠と覚しき地点につく。積雪三メートルの下は見たこともないが、無雪期の峠の姿を空想で描き換えてみる。林道はこの付近から向こうに抜ける、この付近は笹藪で登山道はないから駐車場はないかも、未舗装の砂利道だからあちこち水溜まりだらけかな、ベンチ二つ三つあるかも、地竹採りやキノコ採りが通るだろうな、水場は遠いだろうなと空想している。

標高が低いので朝の割に雪が重い。振り返ると新雪の上にわがトレールがゆるやかな蛇

行で遙か先まで見透かせるのだった。ブナの森に入り、行くほどに巨木帯から低木帯へと変化してゆき、その緩斜面を通過すると林相は変わり岳樺の疎林となってゆき、広潤な銀盤が展開する。雪もほどよく締り遮るものもなく足元を監視する必要もなくなる。従って鳥海山の山頂ばかりを眺め……凝視しながらの歩行となった。ブナの森を出たとたんに鳥海山の雲が動きはじめていたが、今や雲の変化激しく駒取りの八ミリフィルムのように瞬く間に様々に変化する。渦を巻いたり龍となつてのたうち廻ったり、虎となつて跳躍したり伏せたり、次は何になるかと目は釘付けとなつた。相当強い風が吹いているのだ。天気が崩れる前兆とも思われてくる。一刻も早く思つても地図上、峠から山頂まで六キロメートルの県境は高度差一四〇〇メートルとてそう容易なものではない。

九…一〇、次郎滝のある赤沢川を右手に見ながら登るのだが、その次郎滝のよく見える地点で休憩する。口惜しいが右肩の痛み一時和らげる為であった。何十何百の放射線上の沢が出来ている鳥海山の県境をたどって行くと、岳樺も既になく、ただ雪と氷の斜面となり仰ぐ山頂はいつの間にか灰色のレンズ雲となつてゆく。目的はただ一つあの七高山、長い縦走はあの頂上の為の巡礼の道だった。白一色の斜面は大変不安なものである。白一色ばかり見ていると平衡感覚や距離感、傾斜感などがおかしくなる。その点露岩一つでもあればとても助かる。露岩一つ一つを目標にして飛び石伝いに結んで行き、少し北に寄つたが思つたところでひよいと道標を見つけた。唐獅子平であった。五〇メートル先に小屋の赤錆色の屋根があつた。

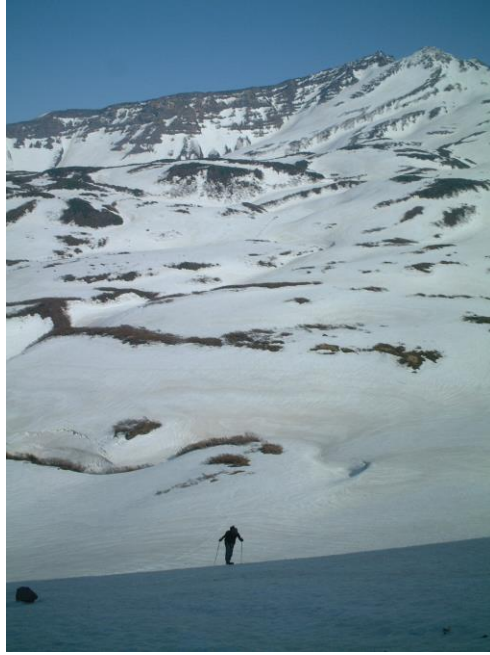
一〇…二一、八合目唐獅子平小屋の前で休憩、小屋は屋根だけ雪上に露出し冬眠中であつた。もちろん期待していなかったが使用不能である。この地点より雲低に入り風雪に突入して行つた。更に一時間、九合目付近の急斜面をわかんを効かせて登るが風はますます強く、登攀ペースは遅々として進まずホワイト・アウトの状態となる。

一三…三〇、唐獅子平小屋から三時間を費やしてゴーゴーと咆哮する火山壁の七高山に

達した。凄まじいシユカブラの巨岩の陰で一息ついて感激する心も凍ってしまう。風速三〇メートル以上吹いているだろうか、火山外輪山の縦走は極めて危険と判断、オーバミトンの中の指も凍傷気味なので即、往路を下山と決定。横風と戦いながら真っ白い風雪の中を信ずる方向へと下って行く。夢中で下った一時間二〇分、だが唐獅子平小屋を発見できずに通過してしまつたらしい。追い風となり、下りなので逃げ足は速い。なるべく高度を失わないでC5を建設したいが、この風この斜面では適地なく標高はどんどん下るばかりである。もし明日天気回復の時は七高山再登頂を果たし火山外輪山を縦走して鳥ノ海、太平へ出て日本海まで予定を完遂したい思惑があるのだ。下っても下っても風と雪は追いかけてきた。左足の弁慶の泣きどころに靴ずれが発生し、痛くてブレーキになってくる。とうとう氷雪の斜面は岳樺の疎林になってきた。これ以上高度を下げたくない、もつと下ればブナの森となり適地はたくさん恵まれる筈なのだが、明日を思えば。八百八沢の鳥海山の山裾は平らな場所が存在しないのか。ここから一二〇〇か一三〇〇メートルか？尾根も雪庇もない地形で、風も避けようもないが岳樺の三〇本程島をなしている所で歩を止めた。ここらが限度だなと思う。岳樺の一群がこんもり島のように盛り上がっている。その風下は浅い沢状というか凹地というか多少の藪も露出していて張り綱アンカーもとれる。傾斜はなさそうで整地してみるとやはり傾斜地なのである。防風壁のブロックを切り出し三段積み of 城砦を造る。毎日毎日同じ仕事をやってずい分手慣れてしまった。まあこんな所で我慢するかとそこにC5を設営、ポールを通す時も風に持つて行かれないように張り綱を藪に結び付けておく。C5完成。これで一晩生命の保証を得たようなものと安心してテントにもぐり込む。どんなに荒れてもこの中では不落の砦、とばかり些か得意だった。靴を脱いで左足の脛にカットバンを貼るがシクシクと痛む。テントは有り難いもの、広々とした部屋で湯を沸かし飯を食う。

ラジオを聴いて気象情報をキャッチ、NHK秋田など入る。良い報せはなく山岳部は駄

目らしい。万一鳥海再登頂に恵まれば、太平国民宿舍かブルー・ラインのどこかにC6を進めたいが、恵まれなかったら百宅口へ脱出も覚悟しなければならない。シュラフに入り考えことをしていたら突然頭上に大音響響きわたる。ハッとして起き上がると同時に閃光と雷鳴！それに続いて滝のような大粒の雹が TENT を叩く。初めは集中豪雨かと思ったが直径一〇ミリ、パチンコ玉くらいの雹が降っているのだと判った。すぐ止むものと多寡をくくって静まるのを待って寝転んでいたが、いつまでも雷雲の中らしく一向に衰えない。そのうち雹が積もってきて三人寝れる TENT が狭くなってきた。それでも今に静まると恐怖心も起きず耐えていた。大物忌大神がお許し下さるものと信じて……。広い TENT 内の四方には登山靴、ホエーブス、ガソリンタンク、コッヘル、食料タッパ箱、オーバー類など置いてあるが、降雹の圧力でゴアの TENT 地が押され、それらは膨らんだ TENT 壁の下敷きとなり物がとれなくなってきた。これは大変、今に TENT は潰されてしまう。寝たまま足で TENT を裏から押して壁の確保に努めたが、雪の場合は有効な筈なのに雹の海では押しても押しても効果なく、足を離せば元の通りになる。さてどうしたものか、外へ出て除雪、いやな除雹するのも雷が恐ろしい。緩やかな凹地だったので、貯まった雹を排出するには落とし込む落差がないので効果は薄いし、掬ったぶん周囲から転がり込むので効率は期待できない。スコップは持参していないし実行のある対策はない。なにせ水分の全くない発砲スチロールみたいな雹粒なので粘り気は全然ない。堅固に築いた防風ブロックも何の役に立たず、いつ止むとも知れぬ降雹は TENT の高さ一三〇センチのうち一〇〇センチ位まで積もってしまった。四面の TENT 壁はそれぞれ球状に膨らんで空間を圧迫し、辛くもアメリカ製の華奢なジュラルミン・ポールによって建っているだけ。ポールが折れるか、ゴア地が裂けるか。大物忌の大神様、何とか TENT が潰れませんかとお許しを請うばかりであった。どうあがいても夜明けまで待つ他ない。TENT 内はいよいよ狭く全容量の二〇％位か。手足を縮めて胎児の如く卵型にシュラフにくるまって、未曾有の出来



春の鳥海山北面

事に現状以上にならない様にと祈る。この耐圧テストを見たらサンライフのマスターは何と言うだろう。エスパースの優秀性を実証しているようなもので、さぞ得意になって写真撮ることだろう。とうとう仮寝のまどろみのうちに夜明けが近づいていた。

●脱出、生還への道のり（四月八日）

潰れる寸前のC5は食事も何も出来ない。ずっしりと雹の錘が載っていて何も装備は取り出せない、とにかく除雹が先決問題だ。テントのファスナーをすこし開けてみる、ザザーと侵入する小指大の雹がテント内にこぼれ込む。全部開けなきゃ俺は出られない。思い切ってファスナーを開けると夥しい量の雹がザック二人分は飛び込んできた。手探りでコッヘルの蓋を手に入れ足を外に出すと又もザザーと流れ込む。落差がないのであるべく遠くへコッヘルの蓋をスコップ代わりに抛り続ける。このテントの姿を撮っておこうとカメラを取りに入ったが雹にまみれて捜すのも大変だった。雪と違って粘りがないので掘れば周囲から流れ込む塩梅で広く掘らないとレベルを低下させることは出来ない。周囲を除雹してテント内の雹も抛り出して朝からクタクタになった。ずいぶん広くなったテント内で朝食ができてほっとした。しかし天気は悪くて視界は効かないし風雪模様なのである。今日は再登頂出来る条件にない。一度も通ったことのない百宅へ退避することを覚悟した。果して三メートルの雪の下的林道をさぐり当て、そしてたぐりたどって里へ出られるだろうか。一筋の生還への道である。

テント撤収も楽ではなかった。アンカーに使ったピッケル、藪に結び付けた張綱を解くのにも深い除雹の末に行われるし、ワカンを捜すのにも思わぬ時間を費やした。降雹は接地の際にもはずむので、風に運ばれ吹き溜まりのように凹地に集中したために一メートルにも達したものだ。

八・四〇、魔のC5を出発する。視界すぐれず方向をコンパスで定めて進むのだが、天

気が良くてもこの大山腹では現在位置を特定することは難しい。昨日も風雪の中の緊急退避だったからここだという自信はない。推定の現在位置から割り出して下るのが、これぞと思う方向には沢が待っている。沢を避けて進むと思わぬ方向に進んでいる。ザックをデポし降りしきる雪のカーテンの中で周囲を睨んで少しでも視界が得られぬかと待機する。今来たトレースを登り返し、そこでまた地図磁石で修正して下り出す。狙いは次郎滝右岸の県境尾根なのだが、周囲五〇メートル位の視界ではじきにまた沢に出くわし、割に浅い谷は膝・腿のラッセルで横断した。視界が効けば対岸の兜山を見ながらのんびり下山できそうなものを。この巨大な山麓でやはり巨大迷路の堕ちている自分を見るのだった。登りは頂上を仰ぐだけで難なく登れたものが、目隠しされれば疑心暗鬼、東進すれば必ず林道どこかに出会う筈と判っていても雪の世界に悩みながら歩き続けた。彷徨三時間の後、平地に出た。そこには落葉松の人工林があった。その林に何となく路形を感じザックをデポして周囲を偵察し、これは百宅への林道、生還ルートを確信しそこで三〇分の食事休憩とした。鍋倉峠より北方へ二〇〇か三〇〇メートルの地点と推測された。やや天候も回復し明るさも増し、高度低下により気温の上昇も感じた。九〇％は日本海へ、一〇％は百宅エスケープの比率で考えていたので百宅方面は五万分の一地形図を持っていた。情報量は二万五千図の二〇パーセントで甚だ心もとないがこれもいたしかたない。

一一・三〇、ちらつと青空がのぞいたり雪や霰が降りかかったり連続の天気の中をひたすら二〇センチ程の重いラッセルが続く。時々「銀色に道」や民謡で自らを励まし行く。暫くして大清水山荘の標柱を見た。周囲のたまたまいから林道を察知し常にはずれないように気を配る。赤沢川に沿った林道となりもはや迷いもない確信の道となった。生水が側壁から流れていて飲みたいと思っても、雪の穴まで降りる気になれず横目で眺めては諦めて生つばを呑み込む。一四・四〇、百宅大森の直下で一本たてる。ピッケルをザックにくくりつけ薄着になって歩きだす。長い長い林道は一〇キロメートル歩くのに五時間かかり

時速二キロメートルかと嘲笑が込み上げてくる。赤沢川も次第に大川となり玉田川が合流して間もなく「てしろざわばし」を渡るが、橋は二メートル以上の積雪で五〇メートル程のヤセ尾根状を呈し川床は水豊に深く、ちよいと恐怖を味わった。橋を渡ると大きな観光看板があり玉田溪谷を案内する手代沢案内板が上部三分の一を雪表に表していた。割に平坦な林道も百宅に近づくにつれて峻しくなり、これが林道かと疑うほどの谷へ薙ぎ落ちた斜面のトラヴァースとなり、ザックへくりつけたピッケルを再び使いはじめる。

四時、五時となりすっかり曇り夕闇が迫ったが、右肩の痛みに耐えられなくなり時々休む。途中小高い所に神社らしい建物がありそこまで登って泊めてもらおうかと弱気になったが、登ったとて雪が詰まってだめだろうなどと又歩き出す。峠を越せば約一五〇メートルの高度差の湾曲の続く林道である。五万図では読めなかった意外に手強い峠道であり、見通しが効くのが救いだ。遥か下方にカーブミラーの朱色のポールが見えたりするが近道というわけにも行かず忠実に林道を辿り、一三キロメートルの林道も次第に終点百宅（四〇四メートル）に近づいて行く。真つ白い平野と点在する民家が見えはじめる。緊張した峠越えで精根尽きる頃、夕闇に閉ざされた集落に着いた。本日の歩行一六キロメートル。百宅集落は除雪されたアスファルト道路以外は一・五メートルの雪に埋め尽くされて眺めれば明かりの灯る家は少ない。最寄のニッサンバンネットがある家に立ち寄り玄関から声をかける。犬は吠えるけれども聞こえないらしく、裏に廻り窓を叩いて挨拶をする。玄関に廻って佐藤馨一さん宅に招じ入れられる。薪ストーブが燃え床暖房の部屋は手足のこごえた身には天国に思われた。佐藤さんは遠慮する私のどが乾いたろうとビールどんどん注ぎ込む。ちようど夕食のはじまるところで刺身やシチュー、春菊のゴマあえ、汁、漬物とご飯をご馳走になり、一休みしたら八島まで送ってあげましょうと約束して下さる。部屋は二〇畳ほどで両親とお婆さん、まだ幼い子供さんが二人と四世代家族と見受けられる。ひとしきり山の話に花が咲き鳥海山や法体の滝の話題となる。興味深く見ているので百宅の



五万図を差し上げた。ビールの酔いとご家族の歓待で暖まってから車で送られることになった。県境踏破のアルミのワカンに彼にプレゼントして乗車、小雪舞う標高四五〇メートルの峠道を越えて車はビュンビュン疾走する。地元の人慣れているから平気なのだが除雪されているとはいえ薄っすらと新雪で白っぽい車道はとても気持ちが悪い。三〇分だと言っていたが二三キロメートルもあるそうで助手席の男の子は眠りこけてしまった。矢島営林署に勤める佐藤さんは顔が広いらしく駅前の三船旅館に乗りつける。夏なら泊めて差し上げられるに今日は泊めてあげられなくて済まない、と何度も言いながら佐藤さんの車は小雪の道を引き返して行つた。小奇麗な部屋に入り、八日ぶりに風呂を浴び、ぶ厚い布団に寝て至極満悦である。

四月九日、髭ぼうぼうで恥ずかしい。矢島の床屋で整髪してから電車に乗ろう。町を散歩して床屋を捜す。矢島は鳥海山麓なのに雪が全くない、どうしてこうも違うのだろうかと疑ってみたりする。矢島の小さな駅……売店で矢島おかき、山ぶどう羊羹などを買う。売店のお姐さんに一両編成の「おばこ号」の前で最後の一枚シャッターを押してもらう。由利高原鉄道は数人の客をのせ田園風景を約一時間で本庄に着く。床屋やったばかりに列車連絡は全くダメになり乗換えの度に一時間、一時間半の待ち合わせの連続となってしまった。酒田で乗換え指定席を買い山形乗換えと仙台に着いたのは二〇・一〇分となった。日本海沿いの車窓からは鳥海山の山麓だけ見えてその霊峰を拝むことはできなかった。

(やまびと三四号掲載)